

追して、簡勁の筆端に、巧にも対象を把握し得たもの即ち是れ。たゞ此の圖を介して想起さるゝは本誌既掲の蘿窓の鶏であらう。同じく水墨を以て揮寫しながら、時と筆者と國土との差は仙と人と、聖と凡との差を生じたが、また當代の佳品の一に羞ぢないと共に、畫史上に於ける其の位置にも亦注意すべきものがあらう。

兩幅共圖上虛白道人の題贊がある。左幅は

上□葡萄似水晶、叱雞伏下未曾行、猗猗衆鷄三四五、□於鳴□在□情

右幅は

料識雄雞欲上時、舉頭擡足日西移、□□鳴□驚殘夢、萬事人間黍一炊

書

評

古今目錄抄

複製

帝室御物、古今目錄抄は嘉禎乃至建長の頃、法隆寺の顯眞得業が同寺の堂舎寶物、年中行事等より上宮太子御傳の諸説に關するまで、得るがまゝに自ら筆録せるもの、古藝術の大寶藏としての同寺に關する古記は、此の一本を外にして全く求め得ないことは既に學者周知の事實である。それだけ美術史料としても最も貴重な遺記の一であるにも拘らず、在來僅に大日本佛教全書聖德太子傳叢書所收、太子傳古今目錄抄によつて流布して、其の片影を示すに止まり、たま／＼傳寫本の流傳あるも其れ等は果して何に由るか、孰れも錯簡或は記敘の轉倒甚だしく、殆んど原本の體様を傳へ得ないものであつた。爲に學者の自ら是れに誤らること多かりしと共に、少くとも不安の念の尠からざりしも數の自然である。殊に故紙を翻へして隨見隨聞、時に應じて筆を加へた本書の如きに至つては、一點一畫の微に至るまで、學者の解釋を二三にする結果となり得

と。虛白道人は或は大德百五十五世南隣宗頓であらうか。斯幅の印文玄の一字明かなるも、一字或は異か。南隣果して玄巽と稱したか否かはまだ究め得ないが、寛永三年閏四月廿三日に圓寂した其の人として、時代的に畫者と一致するものがある。冠傍また東の一字以外判讀し難い。(田中)

五、梅堂筆墨畫山水圖

東京 淺野金之丞氏藏

挂幅 絹本墨畫 堅一米二七・八釐 横三五・六釐

(脇本十九郎「漱芳閣書畫記とその著者淺野梅堂に就いて」参照)

るだけ、在來原本のまゝの複製出版が久しく學界の待望するところとなつて居た。随つて我が美術研究所に於ても、嘗て本書の複製刊行の私議があつたが、不幸にして今日まで其の運びに至らなかつた。

然るに今次某氏の淨財によつて斯本が公刊され、それが帖冊の形式より、句讀、送り假名の朱記に至るまで、原本通りに複製されたことは學界に裨益する所洵に多大なるものがあらう。(田中)

原寸大コロタイプ印刷複製 帖裝二帖 昭和九年七月船叢刊會刊 非賣品

洋畫先覺本多錦吉郎

村居 鏡次郎 編

明治時代に於ける洋風畫家の先覺本多錦吉郎の傳記の編纂はその頌德碑の建設を機として豫て舊門弟の間に企劃されつゝあつたが、稿成つて先般出版された。